

P-6-12

「災害救護薬剤師」研修会をweb開催して～日赤薬剤師会 災害救護委員会～

飯山赤十字病院 薬剤師¹⁾、熊本赤十字病院²⁾、旭川赤十字病院³⁾、
武蔵野赤十字病院⁴⁾、日本赤十字社医療センター⁵⁾、岡山赤十字病院⁶⁾、
日赤薬剤師会災害救護委員会⁷⁾

滝澤 康志¹⁾、下石 和樹^{2,7)}、近藤 智幸^{3,7)}、細谷龍一朗^{4,7)}、
小林 映子^{5,7)}、細谷 治^{5,7)}、森 英樹⁶⁾

【目的】新型コロナウイルス感染症の影響で集合研修会が難しい中、初めての取り組みとしwebでの研修会の開催をおこなった。参加者からのアンケート結果を把握することで、今後の研修プログラムへ反映させ、薬剤師の災害対応能力を強化していくことを目的とした。【方法】「災害救護薬剤師」web研修会の特徴とweb研修会の参加者33名を対象に、研修終了時にアンケート調査を行い、災害活動の経験、講義内容の評価等を調査した。【結果】web研修会では、それまで講義として開催していたものを研修会の事前学習と位置づけ動画を作成しオンデマンドで配信し聴講していただいた。災害派遣の経験がある方は3名(9%)であった。「災害救護薬剤師」研修会を人に勧められるかの問いでは27名(81.8%)の参加者は勧められると回答された。研修会全体の意見として「リモート研修会であれば予定を組みやすく、参加しやすいため今後もリモートを多く行ってほしい」、「この研修自体はやはり対面であることが一番重要なのではないかと感じたので、今後対面でのディスカッション等が行えるようになるのではないかと感じました。」等の意見をいただいた。【考察】講義内容の評価は概ね良好であったと考えられた。今後は基礎研修会への多様化するニーズへ対応できるように各ブロック単位で開催することが大切である。また、救護経験者や基礎の研修会を終了された方が参加するより実戦的な研修会を企画していきたいと考える。

P-6-14

eラーニング動画学習教材を用いた日赤医療救護班研修会

長野赤十字病院 看護部¹⁾、健康管理科²⁾、救急業務課³⁾

峯村 朝子¹⁾、星 研一²⁾、静谷 泰司³⁾、小林 克弘³⁾

新型コロナウイルス感染症(SARS-CoV-2)流行に伴い、当院では職員間の飛沫感染予防の観点から集形式の研修会が制限されることとなった。一方で令和元年台風19号災害により長野も被災し、災害救護を業務とする赤十字病院として災害時医療救護班活動の重要性、能力向上をますます実感する職員が多かった。そこで院内の救護関係者で非集形式の研修会を行う方法を検討し基礎知識の習得を目標として、これまで研修会用に作成したPowerPoint教材などに講義音声をつけ加えた動画教材を作成し個人への通信環境に配慮しDVD媒体で医療救護班員に配布した。さらに受講した救護班員は、理解度を確認するためにGoogle form上に各講師が作成した問題に期限を決めて解答していただく形式の研修会を令和2年、3年、4年と3回行った。講義内容は1.赤十字の災害救護活動(支部) 2.CSCATT(災害Co) 3.災害看護(災害看護CNS) 4.災害時における感染対策、個人防護具着脱手順(感染管理室) 5.台風19号の救護班活動(出勤した医師、検査技師) 6.EMIS]SPEED (DMATロジスティクス) 7.無線通信と情報共有(救急業務課) 8.災害医療コーディネーター体制の業務と課題(災害Co)。この研修の利点としては研修会を準備する側では、録画による講師は内容を客観視できるため改善が図れること、受講者側では、隙間時間に講義を受講できることや繰り返し内容を確認できること等があげられた。欠点としてはリアル研修では可能な、率直に質問したりグループ学習を通じて顔の見える関係、チームビルディングが難しい事、学習時間を業務内で行うことが困難なこと等が挙げられた。利点欠点を合わせて、今後は動画学習と実習形式を合わせたハイブリット研修方式で研修効果がさらに向上すると思われた。

P-6-16

第4ブロック合同災害救護訓練の救護所訓練計画について

大阪赤十字病院 国際医療救援部

光森 健二、仁田 涼子、片山 珠、河合 謙佑、池田 載子、
中出 雅治

【目的】大規模災害への対応能力の検証、強化を目的に毎年第4ブロック合同での災害訓練を行っている。今回この訓練での現場救護所訓練に関して訓練計画作成および当日の実施や参加者の評価に携わったので、それらを通じて合同訓練の問題点などを考察した。【方法】訓練は本部訓練、避難所アセスメント訓練、避難所救護訓練、現場救護所訓練と災害ボランティアセンター運営を1日で行った。現場救護所訓練では2基のdERUを展開し各々に1時間ごと1〜2の救護班が割り当てられ、模擬患者を診察する。これを4クール繰り返す。訓練の大筋は主催する奈良県支部が作成。参加支部、病院などが対面もしくはオンラインでの会合を3回行い最終計画を作成した。訓練の目的は1.チームビルディング、2.救護所での診療・処置、3.重症患者の後送、4.心のケアとして、1時間の割り当て時間で模擬患者の診療を通して上記が適切に行われているか訓練終了後評価を伝えることとした。【結果及び考察】計画作成の過程で1時間という限られた時間でどこまで目的を盛り込むか、コストの関係で消耗品を実際には使用しないなど計画段階で種々の制限があった。今後実際の訓練の結果も踏まえて本訓練の実効性などを考察する予定である。

P-6-13

災害救護の思考を学ぶ救護員研修での図上演習の効果

日本赤十字社石川県支部 事業推進課

森岡 誠人、富樫 純治、磯部 直哉

【はじめに】救護員としての赤十字看護師等研修プログラム(以下、研修)「災害看護論4」では、災害救護に必要な技術と実践能力を身につけることを目的としている。従来、実働訓練としてテント設営、応急手当、搬送等を行ってきた。今回、コロナ禍により、必要最小限の人数・スペースで開催できる図上演習に変更し、災害急性期の救護活動に関する思考を学ぶことを目的とした研修内容を試みた。その結果を報告する。【取り組み】地震被害による救護班派遣の想定で、災害急性期を4つのフェーズに分け演習を進めた。1.出勤準備:ブリーフィングでCSCA確立とチームビルディング。2.救護所設営:傷病者の動線や救護班の役割を検討しホワイトボードに救護所レイアウトを作成。3.TTTの実施:トリアージを行い後方搬送の調整。コントローラーが追加設定を付与し、それらをホワイトボード上に展開し2の内容を検証。4.撤収活動:継続に必要な情報を整理。最後にコントローラーを交えCSCATTTに則ったブリーフィングを行った。【結果と考察】アンケートによる評価では、受講者の理解度は高い結果が得られた。「話し合いで考えを共有できた」「実際の活動をイメージできた」という意見も得られた。実働訓練は設定に限界があり、災害で実践できるか不安という声も聞かれていた。図上演習では、自由に状況設定でき、災害サイクルを包括的に経験できる。また、話し合いを繰り返すことで、自ら考え、その結果を振り返ることができる。この過程により災害救護に必要な思考を学ぶことができた。【まとめ】コロナ禍においても、図上演習により、災害看護論4の目的である実践能力を身につけるための訓練を実施することができた。

P-6-15

災害時初動対応におけるアクションカードの有用性について

古河赤十字病院 医療社会事業課¹⁾、放射線技術課²⁾

海沢 亮太¹⁾、岡野 嘉一¹⁾、大木 祐弥²⁾

【はじめに】当院は平成9年に災害拠点病院の指定を受け、毎年災害訓練を実施してきた。災害時に災害拠点病院としての方針を決定する際に各部署の人的・物的被害状況の確認や災害対策本部への速やかな報告は重要である。しかし、各部署では確認項目が明確化されておらず、責任者やスタッフの役割も曖昧であった。当院では「新人職員でも使用できるアクションカード」を目標とし、令和3年4月から災害時における各部署のアクションカードを順次作成し、アクションカードを用いた災害訓練を初めて行ったので、その効果や課題について報告する。【方法】訓練参加者に対しアクションカードの有用性についてアンケート調査を行った。【結果】アンケートでは「本日使用したアクションカードはどうだったか」との設問では「非常に使いやすい」が15.4%、「使いやすい」が71.2%、「どちらとも言えない」が11.5%、「使にくい」1.9%と回答した。理由としては、「チェックすべき項目が書かれていて、カードに沿ってスムーズに被害状況確認をすることができた」と、意見があった一方、「分かりにくい項目があった」、「始めて見た人には分からない名称もあった」、「分りやすい項目があった」、「始めて見た人には分からない名称もあった」との意見も聞かれた。【考察】当院で作成したアクションカードは色分けや行動優先順位の明確化、確認すべき場所が記載された地図を記載するなど見た目も分かりやすくさと保管場所を決めることなど、混乱している状況の中でも落ち着いて行動できる部分の評価に繋がった。【結論】アクションカードは災害時初動対応において有用であったと考える。今回の訓練で明らかとなった課題を修正するとともに、近年多様化する自然災害リスクへ対応するため、定期的な訓練実施とアクションカードの見直しを行っている。

P-6-17

災害時に診療放射線技師は何をするの？

日本赤十字社和歌山医療センター 放射線治療技術課

湯浅 大輔、高野 匡基、是枝 大輔、中 大輔、口井 信孝、
梅岡 成章

【目的】当センター診療放射線技師における災害時の対応は長く整備されていない状況が続いていた。実際、診療放射線技師35名にアンケートを実施すると、災害時の対応が「できる」が5名、「できない」が30名であった。この状況を改善するため科内における災害時の対応を整備し、「できない」からの脱却を目指す。【方法】社会課及び医療社会事業部の協力のもと、災害対策医療マニュアルに規定されている診療放射線技師の役割から災害時の運用を検討し、アクションカードを作成した。また、各装置のメーカーに過去の災害による装置の被害等を調査して被災後の装置の点検マニュアル、画像サーバー関係の通信状況確認マニュアル、黄ゾーンでの撮影マニュアル、災害用ボータブル装置使用マニュアル等を作成し、時間外の発災を想定した教育訓練を実施した。【結果】時間内と時間外に分けて責任者に責任者アクションカード、メンバーとなる各診療放射線技師用に本館地下階、本館4階、本館6階の配属先毎にメンバーアクションカードを作成し、災害対策医療マニュアルと実態に即した具体的なアクションカード並びにマニュアル等が整備できた。また、直置している診療放射線技師全員を含めた36名に講義による教育と実技による訓練を実施して「知らない」から「わかる」に全員がステップアップできた。【考察及び結論】現場での診療放射線技師の災害時の対応が全くない状況から体制を整備でき、「知らない」から「わかる」にステップアップできたことは組織の取り組みとして大きな前進である。「わかる」から「できる」へのステップアップには継続的な教育訓練が肝要であり、持続可能で効率的な教育体制の構築が今後の重要課題と思われる。

10月7日金
一般演題(ポスター)
抄録